

福田恆存 思想の〈かたち〉

浜崎 洋介著

今年は、福田恆存誕生百年で、初の研究書である。八〇頁にも及ぶ註と豊富な索引をつけるなど、本格的な福田恆存研究が三四歳の文藝批評家によつて書かれたことは、福田が既に日本文学史の一人になつてゐるといふことである。

きはめて伶俐な分析力と並外れて忍耐強い資料収集を果し、この大部の書を成立させた。文學、人間論、言語論と福田の多岐に亙る文業を、きつと青年期のほとんどの時間をこの著書のために費やしたに違ひない程の研究振りである。それほどに福田への思慕が強いのだらうが、讀者にとつてもそれは幸福をもたらしてくれた。

ただ、福田恆存は複雑だから、その論は読み取りの正確さを期するあまり時に讀者の興味を削いでしまふことや、細部の正確さを期するあまり全體を見失つてしまふこともある。本書でも保田與重郎、芥川龍之

伶俐な分析力による本格的な研究書

介、太宰治と読み較べながら福田の文學的營みを捉へて「外在Ⅱ超越する形而上学的理念を語ることに先立つ、内在Ⅱ関係することの事理的リアリティ」という主題が浮び上がってくるだろう」といふ記述を讀むと、少々戸惑ふ。福田の『人間・この劇的なるもの』(昭和三〇年)を愛讀した者としては、「先立つ」の前後が逆であると思へた。福田が「超越」を意識し出したのはいつなのかは、たいへんに興味深い問題である。それを保田の「血統」から離れた時期と同時に考へ、「太宰治再論」の書かれた昭和二三年と特定したことは、この著書の金字塔である。しかし、「内在Ⅱ関係することの事理的リアリティ」とは血統であり、そのなかでの生は演技に過ぎず、「外在Ⅱ超越する形而上学的理念」とは絶対のことで、それを意識することによつて日常の平板さから脱出しようとする行爲を演戲と考へてゐたとすれば、どちらが先立つ問題かは明らかだ。私の誤讀であることも危惧しながら更なる研究を待ちたい。

最後に注文を一つ。引用の假名遣ひは正確に。素晴らしい成果だけに残念だ。



新曜社 4095円

文藝評論家・前田嘉則